

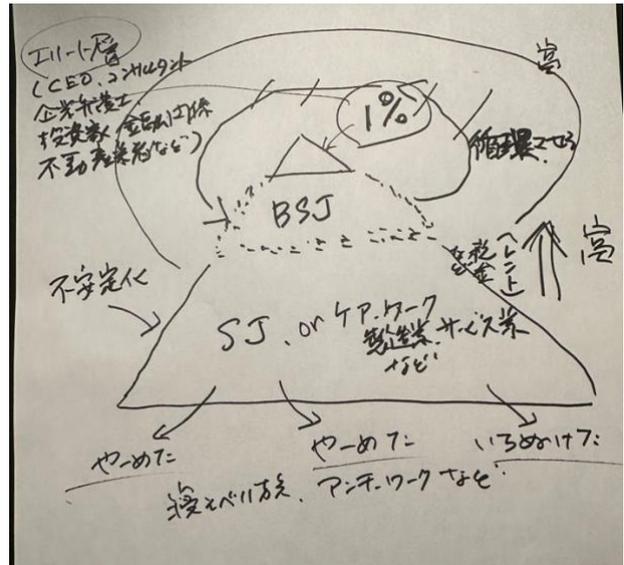
- 1, ブルシット・ジョブとエッセンシャル・ワークの逆説
- 2, 資本主義の「略奪」的段階
- 3, 「解釈労働」と天皇制
- 4, 危機のなかで、天皇制はいかに機能するのか？

1, ブルシット・ジョブとエッセンシャル・ワークの逆説

エッセンシャル・ワークの逆説→「その労働が他者の助けとなり、他者に便益を提供するものであればあるほど、そしてつくりだされる社会的価値が高ければ高いほど、おそらくそれに与えられる報酬はより少なくなる」(デヴィッド・グレーバー『ブルシット・ジョブ』岩波書店、訳 271 頁)。

ブルシット・ジョブ→「BSJ とは、あまりに意味を欠いたものであるために、もしくは、有害でさえあるために、その仕事にあたる当人でさえ、そんな仕事は存在しないほうがましだと、ひそかに考えてしまうような仕事を指している (bullshit は、無意味な、でたらめな、ウソのといった意味のスラング)。もっとも、当人は表面上、その仕事が存在するもっともらしい理屈があるようなふりをしなければならず、さらにそのようなふりをすることが雇用上、必要な条件である」(訳 27-28 頁)。

2, 資本主義の「略奪」的段階



BSJ=ブルシット・ジョブ

SJ=シット・ジョブ

3, 「解釈労働」と天皇制 (以下の引用はすべて、酒井「自発的隷従論再考」『賢人とドレイとバカ (仮題)』亜紀書房 (近刊)より)

問い→天皇制にひとは「自発的に隷従しているのか?」

そもそも「自発的」に「隷従」しているとはどういうことか?

解釈労働→「「解釈労働」とはなにかというと、わたしたちが日常的にふつうにやっていることです。わたしたちは、いつも他者と接触しながら生活していますよね。そして、つねにその他者がなにを考えているんだろうとか、なにを望んでいるんだろう、どう感じているんだろうと推測をはたらかせています。というかそういう傾向をもっています。ようするに、その推測の努力が「解釈労働」です」¹。

解釈労働の不均等な配分→「問題は、この「解釈労働」

¹ 解釈労働についての議論は、David Graeber, The Utopia of Rules: On Technology, Stupidity, and the Secret Joy of Bureaucracy, Melville House,

2015 (酒井隆史訳『官僚制のユートピア——テクノロジー・構造的愚かさ・リベラリズムの鉄則』以文社、2018年)を参考にしてている。

が不均等に配分されているということ、つまり、だれもが等しく「解釈労働」を遂行しているわけではないということです。いっぽうに、それをたえまなく行使しなければならない人びともいれば、ほとんどそれをなしにすませられる人びともいる。そして、このような不均等な配分は、あきらかにヒエラルキーにおける上位／劣位の区分と重なっています。

すこしむずかしく響くかもしれませんが、このような事態を、人びとは日常的にさまざまなかたちで気づいているし、かつさまざまなかたちで表現されてもいます。たとえば「男には女の気持ちはわからない」とか「女は男の浮気をすぐ見抜く」といった決まり文句がありますよね。これらは両者ともに、「解釈労働」のジェンダー間での不均等な配分を男性側と女性側の視点から見たものにほかなりません。たとえば妻は夫がなにを考えているか、なにを望んでいるか、どのような機嫌でいるのか、つねに推測しているけれども、夫は妻がなにを考えているか、なにをしたいのか、どういう気分なのか、すくなくとも妻ほど推測しなくてすませています。つまり、男性と女性のあいだでは、「解釈労働」の負担は女性に重く負わされているのです。

解釈労働と暴力→「このように「解釈労働」の非対称は、社会の上下関係、つまりヒエラルキーに重なっています。としても、なぜヒエラルキーの上下が「解釈労働」の不均等な配分とつながることができるのでしょうか。それを可能にしているのが暴力なのです。

暴力を使うことができるようなとき、相手の顔色をうかがったり、相手のいまのおもいとか、希望とか、おかれた状況などをいっさい省略できます。これをしてほしい、といったとき、相手を説得したり誘惑したりするには、あの手この手が必要ですが、暴力をちらつかせながらであれば、かんたんにさせることができます」。

解釈労働と天皇制→「天皇制への同意の調達に、いかに「解釈労働」が作用しているかはおわかりかとおも

います。メディアも大衆も、つねに天皇「陛下」の内心をおもんばかっているといわれています。「お気持ち」という表現は、ここで「解釈労働」が作動しているありようをよく表現しています。天皇や皇室の人びとが、大衆の「お気持ち」をおもんばかるとはいわないでしょう。「お気持ち」とは、つねに上から下々にむかっておりてくるものであり、かつ、その不可視の流出を、下々のものが想像するときにあらわれるものなのです。

この天皇制の事例では、天皇への愛着をだれよりも示し、だれよりも解釈労働を遂行しているのは、なんとなく大衆というイメージをもっています。しかし、2010年代にくっきりした、そしておそらくあたらしかったのは、それを率先しておこなったのが知識人、保守あるいは右翼政権に批判的な知識人たちだということです。かれらは天皇あるいは皇室の沈黙、あるいは発言の断片のうちに込められたメッセージ、すなわち「気持ち」を解釈し、その解釈の方法を、メディアを通して大衆に提示してみせました。たとえば、天皇は国民の安寧を祈る役割をはたしているとか、天皇はだれよりも戦後日本の現状を理解している、といった具合です。そんなお話しを耳にするたび、「あんたきいたんか」とツッコミを入れるしかありませんでした。そこから、天皇は安倍首相を嫌っている、天皇はだれよりも右傾化を憂慮している、などといった、天皇や皇室自身は口にしないことを推測して展開される、ほとんど妄想といってしまうような「解釈労働」が披瀝されていったわけですが、これが2010年代を一種、異様なものにしていたようにおもいます。

もしかすると個別の解釈のうちには「あたっている」ものもあるのかもしれませんが。しかしここで重要なことは「解釈労働」そのものを、知識人がやってみせることにあります。天皇制のはたらきの核心のひとつである「解釈労働」を通したヒエラルキーの構築と強化を、知識人がみずからおこなってみせていることです。そしてそれを通してみなければならぬのは、天皇の「お気持ち」をいつも考え、ときに熱狂

するといったある種の「愚かさ」のイメージを大衆に押しつけるのはまちがっているということです。それを率先しておこなっている、しかもそれに知的正当性を与えているのは知識人なのです。

こうした天皇をめぐる「解釈労働」を通して、知識人たちの天皇や皇室への感情は、崇敬、というかほとんど愛ともみえるような感情に転化している事態は、しばしばみられます。「解釈労働」は、支配する相手の側の心をつかもうとする努力です。相手は、じぶんのことなど眼中になくても、こちらはその主人のことをいつも考えています。これは、感情や欲望がつねに当の対象に備給しているということでもあります。ここからこの関係のうちには、支配されているにもかかわらず、しばしばそこにストレートな暴力やいじめのような要素があるとしても、支配される側から支配する側への愛情のようなものが生まれてくるひとつの源泉があります。

たとえば、奴隷が奴隷の主人への愛を示すこともあります。アメリカ合衆国では、いわゆる「ハウスニグロ」と「フィールドニグロ」を分割することで、奴隷主はたくみに、奴隷間の連帯を分断しました。そして、ハウスニグロはときに主人やその家族を愛し、おなじように同胞である奴隷に侮蔑意識をもちました。だからマルコム X は、生涯、同胞の一部に深く根づいたハウスニグロの心性。支配者への愛情と内面化された差別意識の克服が、レイシズムを粉碎することには絶対的に必要であるとかんがえていました。

・・・

天皇制にかかわるものごとは、究極的には暴力、しかもしばしばあまり隠されていない暴力によって包囲されています。天皇にまつわるものの批判を、わたしたちは公然とすることがむずかしいことを知っています。そうした批判が許容される人間関係のなか以外の環境において、天皇にかかわるなんらかの批判的コメントは、たいてい場を凍りつかせます。その反応が、もちろん、じぶんが敬愛をもつものを侵害されたことの不快であることもあるでしょう。しかし、たぶんそのほとんどは、なにかタブーが破られた、お

そろしいななにふれた、という感覚がまさっているようにおもいます。

そしてこのおそろしいなにか、が、暴力によって積み上げられてきた恐怖感だともおもいます。

わたしたちは、天皇のかかわるなにかに公然とふれること、政治的・批判的にふれることが暴力に見舞われることをよく知っています。さらにその暴力が、どのような残酷なテロルであろうと、さしてきびしく政治的にも法的にもメディア的にも責められないこと、それどころか支配的力によって陰に陽に支持されているようであることも知っています。日本の近代において、右翼のテロリズムのほう量が量的にも質的にも（要するに成功したという意味です）圧倒的にまさっているのは、それが究極的には体制によって支持されている、あるいは体制によりかかっているからです。そしてこの暴力は、たとえば右翼の街宣車のような装置によって日常的に喚起されています。あの拡声器を通して延々とくり返される罵声、そしてあの軍歌の異様なヴォリュームは、それがスルーされることによって（おなじことを左翼組織がやったらどうなるか、考えてみてください）、そのままかれらの力を体現しているのであり、天皇制にかかわるなにかに批判的にふれるときはその暴力に直面するであろうことをわたしたちにおもいらせているのです。

わたしたちは天皇を「敬愛」しているとされています。しかし、それがこうした言葉のただしい意味でテロルへの恐怖の歪曲された表現であるとはいえないのでしょうか？ たとえば、このように考えてみましょう。もしこうした恒常的テロルの環境が消えたとします。マスコミも敬語表現をやめ、その制度のありかた、その存在そのものの是非について、自由闊達に問題を提起でき、かつ議論できる雰囲気がつくられたとしましょう。つまり、人びとは「解釈労働」をやめます。そのとき、「自発的」な服従をどこまで調達できるでしょうか。

天皇制は字義通りのテロルに浸りきっています。脅迫の手紙を受け取ったり、あるいは街宣カーであ

ることないことのデマをふくめて名前を連呼される。こうした経験やそのような出来事の知識によって知識人は、それをよく知っています。したがって、知識人もふくめて、日本における天皇への敬愛なるものの裏には、こうした暴力への恐怖がべつとりとつきまとっているようにおもいます。右翼ではない知識人が、天皇への愛や信頼をなにごしかポジティブに捉えることそれ自体に、恐怖感とその否認があるのだ、と。これは暴力への恐怖を率直に表現できない、暴力への恐怖を抑圧してしまうマチズモとも深く関係しているとおもいます」。

4, 危機のなかで天皇制はいかに作用するのか？

(1) 二つのヒエラルキー

A ウルトラネオリベラル化→あからさまな排除、切り捨て、棄民、差別、暴力→安倍首相的「カリスマ」

B 抱擁の幻想→「国民」全体の救済→天皇

ABの振幅によって、システムが温存させる

(2) ヒエラルキーの保全と断絶の否認

(3) 虚偽とタブーの受容可能性

・